

第52回国際結核・肺疾患連合世界会議の報告

結核研究所

国際協力・結核国際情報センター長 山田 紀男

第52回国際結核・肺疾患連合世界会議は2021年10月18日から22日まで、「全ての人に肺の健康：新時代の解決」テーマに、COVID-19パンデミックのために、昨年と同様にオンラインで開催された。119か国から4,000人以上の参加登録があった。発表内容は多岐にわたるため、概要を述べるのは難しいが、昨年に引き続きCOVID-19関連、結核患者発見に関連したセッション（診断の新技术、スクリーニング等）が多かったと思われる。患者発見について印象に残った発表は、特別セッション「2030年までにEnd TBを達成できるか」における、国際結核・肺疾患連合（IUATLD）とWHOが従来推奨してきた結核対策の基本（医療施設を受診する有症状受診者からの結核診断による患者発見）の成果と限界について触れたIUATLD会長Guy Marks氏による発表であった。この基本的対策が重要であることは論をまたないが、「これまで、積極的患者発見を活用した国においてのみ、地域の持続的結核感染を止めることができた」と積極的患者発見の重要性を述べられていた。

以下、結核予防会が実施した活動について紹介したい。本会議に先駆けて10月5日に結核予防会主催で結核のスクリーニングをテーマにしたワークショップが開催された。岡田国際部長がコーディネーター、小野崎国際部付部長とインドネシアのDr. Bintari Dwihardianiが座長となった。日本における胸部レントゲンによる集団検診の役割（加藤結核研究所所長）、結核高負担国を卒業となったカンボジアから結核減少に貢献したと考えられる要因（末端への結核対策の拡大、レントゲンの活用など）、インドネシアにおけるAIによる診断支援システム（CAD）を活用した積極的患者発見の経験、胸部レントゲンとCADの現状、典型的な症状を呈する結核と呈しない結核の診断での胸部レントゲンの役割、パキスタンからウルトラポータブルレントゲン装置とCADを活用した経験と6つの発表があり、レントゲンスクリーニングのターゲットやレントゲン結果の分類、レントゲンによ

るスクリーニング陽性で菌が陰性の場合どのように対処すべきかなどについてグループ討議も行われた。本ワークショップのテーマは、上述の典型的な結核症状を有しない結核患者等への積極的患者発見に関係する重要なもので、多くの方が参加された。本ワークショップの録画は、YouTubeで視聴可能である（www.youtube.com/watch?v=6grPSGsHJKw）。

また、結核研究所は学生・大学院生が研究の成果を発表する機会となるStudent Late Breaker Sessionのスポンサーとなった。今回は第5回目で、小児結核の治療経過モニタリングに役立つ可能性のあるマーカーに関する研究、院内感染対策に関する研究、モンゴルにおける大気汚染の呼吸器疾患への影響の研究、禁煙に関する研究が発表された。なお、毎年開催されてきたブースも昨年に続いてバーチャルで設置され、予防会の活動の紹介をおこなった。

閉会式の間で行われた秩父宮妃記念結核予防世界賞の授与式では総裁が英語でお言葉を述べられた。今回の世界賞は、スウェーデンのProf. Knut Lönnrothに授与された。

本会議は2年連続でオンライン開催となった。オンライン開催は、旅行を必要としないため、より多くの方が参加する機会を得ることができるという利点がある。しかし、例年実施していた国際研修の同窓会など直接会う機会も重要なので、理想的には、現地開催とオンラインの両方の形で実施されることが望ましいと考えられる。早く、現地開催ができる状況になることを祈念する。🙏